英雄の条件（仮）

城島　和也

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
英雄の条件（仮）

【Ｎコード】
Ｎ９１２９Ｘ

【作者名】
城島　和也

【あらすじ】
神という存在に飽きたとある神が転生を決行⇒失敗。
一人の人間を巻き込んで、当初転生する場所だった日本がある世界とは異なる世界、つまりは異世界に転生してしまった。さて、どーなりますやら・・・

注；説明多し。主人公チート↑よくある感じですよねー。ハーレム・・・なるか？説明激多し（大切なことなので２回・・・
そんなん関係ねーぜっていうかた向けです。

何を思ったか、文才もない作者（作者というのも憚られるw）が気まぐれと自己満足のために書いているものです（汗
面白いと思ってもらえればとても嬉しいです。
感想もらえたら、内容問わずはしゃぎますw
そんなかんじでどーぞー

プロローグ

――神界――

ガリガリガリガリ―カッカッカッ―ドスン！！

「フー。こんなもんでいいかな」

始まりの神ゼウスが己の体を材料にすべての力を以て創造した文字通りの神のための世界。神界。

その世界の片隅で一人（柱？）の神が地面に奇妙な図形を描いている。

『ゼウスに最も近い神』『前神未到』『女神殺し』『俺のヘラちゃんを返せ』『一人のときはきをつけろ』などなど様々な名―後半は違う気もするが・・・―をもつ神・アリオン。

彼はその奇妙な図形。俗にいう魔法陣の中心に立っている。

「年齢はー、１５歳くらいだったら動きやすいかな？　今の俺の記憶はひきつけないけど最低限の知識は植えつけれられるはず・・・っと。」

ガリガリッっと新たに書き加え中心に戻るアリオン。

彼は『神』という存在に飽きていた。そんな彼がゼウスの聖遺骸を見つけたことによって本来不可能なはずの神→人間への転生をしようと決意したのは当然のことだった。

他の神が「俺、神に飽きたー」とかアリオンが言ってるのを聞けば、おそらく集団でアリオンを襲っていただろう。「お前、１０人も女神囲っといてふざkんなよっ」とか「このくそリア充がっ」などの罵倒とともに・・・

「よし、俺専用転生魔法陣完成～。」

片膝をつき、祈るような姿勢をとるアリオン。

「・・・我らが父ゼウスよ［たったったった］「汝の息子が一人、アリオンが希う（こいねが）。［タタタタタ］魔法陣が淡く発光し始める。

「汝の力を以て我の願いを聞き入れんことを・・・［ダダダダダ・・・］

魔法陣の輝きが増す。

「転ｓ「アリオンっ（様・この野郎・お兄ちゃん・さん）」

「うおっ！？」

１０人の女神（アリオンの女）たちが声を荒げ、魔法陣の輝きが数瞬、鈍くなったが、輝きが発光が収まったときアリオンの姿は神界から消えた。

その場には１０人の女神だけが呆然と取り残された。

プロローグ（後書き）

さて、始まってしまいましたよー

正直、先の展開は作者にもわかっておりまっせん（汗

グダグダにはならないように頑張っていきたいですね。

面白いと思ってもらえば幸いです。

どぞ、長いおつきあいを（ゲザー

たどり着いた街と出会い（前書き）

この話の最後まで主人公出てきませんw

そんな感じでどーぞー

たどり着いた街と出会い

――ヒンメルの街――

私の名は、イリアス・フォン・ロンドベルト・ツヴァインベルグ・・・だった。
今は、イリアと名乗っている。といってもこの2週間、あんまり人と出会わず、名乗る機会がなかったので名乗るつもりといったほうが正しいが。

私と私の従者であるアイリスは、今、しばらく滞在することに決めた＞花の街・ヒンメル＜の街道を歩いている。目的地は奴隷商。

私は戦闘には多少自信があるのだが、いかんせん世間のことをあまり知らないのだ。
アイリスは多少、常識を知ってはいるが、それでもといったレベルであるらしい。
そんな私たちは生きるために「守護者」として、稼いでいくつもりなので、家のことを任せられるものを探そうとなり、公の応募は少し危険だろうとアイリスの判断で奴隷を買ったほうが安全だろうとなったのだ。

――奴隷館・ロッキー――

「ここまで来たのはいいが、やはり気が進まないな・・・」
「お嬢様。前向きに考えてください。お嬢様に買われた方は他のとこにいくより必ず幸福ですよ。」
「そーゆうもんなのかな」

イリアスの言葉を無理やりのみこみ、両開きの扉を開ける。

「いらっしゃいませ。おや？初めてのお客様ですね。初めまして。私（わたくし）、当奴隷商の支配人、ボンド・ロッキーと申します。本日はどのようなご入り用で？」

館の中はキレイに掃除されており、正面奥に４つの扉、その真ん中に受付のようなものがある。その受付にいる男―３０代ほどの中肉中背、面長の髭のない小奇麗―が、入ってきた私たちを見るなりよく通る声で挨拶してきた。

「私はイリア、こっちはアイリス。今日は身の回りを世話できる者を探している。」

「イリア様にアイリス様ですね。はい、了解しました。それではまず、なにか身分を証明できるモノはお持ちでしょうか？」

言われ、二人とも『ガーディアンズカード』を渡す。

「はい、結構でございます、奴隷を直接ご覧になりますか？それとも、私が数人連れてきましょうか？」

「そうだな、直接見せてくれるか？」

「畏まりました。少々お待ちください。」

受付のボンドさんの手元が淡く光る。おそらく簡易通信術式を使っているのだろう。二言、三言言葉を交わしてから私たちの方に向き直る。

「お待たせしました。どうぞこちらへ。」

私たちから見て右から2番目の扉に向かうロッキーさんについていく。

扉の先はジグザグに続く廊下だった。
明かりは充分にあり、なかなか清潔にしてある。

廊下の両端には、鉄格子がはめてある、所謂、牢屋・・・なんだけど、牢屋って言葉が似合わない。
中には2～4，5人ほどの人が入っており、寝ている者、腕立て・スクワット・柔軟などなど体を動かす者、こちらに手を振る者など実に様々な人たちがいる。ただ・・・

「なんというか。給仕には向いてなさそうな感じの人たちだな・・・」

後ろを歩いているアイリスに囁く。
アイリスが反応するより早く、ロッキーさんが声を発する。

「それはですね。お二人は『守護者（ガーディアン）』の方ですから、この先戦闘できる者が必要になるかも知れません。・・・その時には是非、我が商館へと・・・と、思っておりますのですよ。」

なるほど商人らしい考えがあったのだな。

「ちなみに、左から2番目のほうに給仕ができる、というか戦闘ができない者がおります。」

7回角を曲がったところで2階に上がるのだろう階段があった。

2階につくとそこは大広間といったところだった。
その広間の中央に12，13・・・15人の男女が性別関係なく整列している。種族は人間族のみだ。

「それでは、紹介いたしましょう。全員「元」がつきます。向かって右から、執事、執事、執事見習い、庭師、料理人、ーーー」

ロッキーさんが奴隷たちを紹介してくれるのだが、私―おそらくアイリスもだろう―は別のことに気をとられていた。

（奴隷たちの中では・・・ない？壁際にいる2人も違う。・・・どこから？）

どこかは分からない。けど、かなり近い場所から漠然とした「何か」を感じる。
この大広間にある扉は私たちがやってきたのを抜くと、残りは6個。おそらく一つはロッキーさんが言っていた、戦闘以外の者がやってきたのだろう扉だろう。

ということは、残るは5個。
そのうち4つは左右に対称にある。
なんとなくだが、正面に見える残りの一つからかんじるのではないだろうか。

（・・・いや、まずは今日の目的のほうが先だな。）

「ーーーメイド見習い。となっております。ご希望に添える者はおりますでしょうか？」

「うん、アイリスどーしたらいいかな？」

事前にアイリスと決めていたのは「女性」であることだけ。
なので、実際に見たアイリスの意見がほしい。

「そうですね、人数は2人。変に染まってないということで、メイド見習いの子と農婦の子でよろしいかと。」

・・・うん。2人とも、初々しい感じだ。真面目そうなのもいいな。

「よし、メイド見習いの子と農婦の子がいいかな」

「こちらの2人でございますね。」

「うん。」

「畏まりました。お値段のほうですが、2人合わせて金貨1枚となります」

言われ、アイリスが金を払う。

「はい。ありがとうございます。こちらがシルヴィー、こちらがセララといいます。2人とも挨拶なさい。」

「ハイ！！よろしくお願いします。ご主人様！！シルヴィーといいます！」

「せ、セララですっ！よよ、よろしくお願いしますですっ！！」
元気いっぱいのメイド見習い・シルヴィーと若干緊張しているらしいセララが挨拶してくる。
「うん。こっちこそよろしくな。シルヴィー、セララ。私はイリア、こっちはアイリスだ」
言うと再度、よろしくお願いしますと頭を下げてくる。
「それでは、シルヴィーとセララには召し物を与えてきますので少々お待ちいただきます。ルゼさん、二人を頼みます。ガーグ君残った者を、戻しておいてください。」
そういわれて、今まで壁際でじっとしていた二人が動き出す。
「それでは入口までお願いします。」
といって左側の扉に向かおうとする。
「あの、すいません。あの部屋はなんなんですか？」
気になっていたことを尋ねるとロッキーさんは足を止め、振り返る。
その顔は、笑っている。
純粋に嬉しいといった感じの笑みだ。
「ほう、お気づきになりましたか。気になるのでしたらこちらにどうぞ。」
広間の奥の扉に向かう。

扉を開けロッキーさんが先に入る。

私たちも後に続く・・・そこには、人が浮いていた。

たどり着いた街と出会い（後書き）

さっそく、主人公に攻略されそうなこが４人。

アイリスさんは微妙でしょうか・・・

というか、イリアの感じが一定しないんですよねー

まあ、おいおい落ち着くのを期待しますか（ナゲヤリー

面白いと思ってもらえれば幸いです（ゲザー

眠る少年と目覚め（前書き）

・・・とりあえず二日に一回のペースで更新したいなーっていう当初の目標が
すでに、過去のものに。。。（｜＿｜；）

しかも少し短め？

更に主人公しゃべらないｗ
イリアの口調安定しないｗ

そんな感じでどーぞー

眠る少年と目覚め

――奴隷館・ロッキー――
15，6歳くらいだろうその少年は、その・・・男性を表現するのに相応しいのかは分からないのだけど、キレイだった。
人づての話だけでしか聞いたことのない、漆黒の髪は見ただけで分かるぐらいサラサラだろう。
それに相反する透き通るような白い肌。
整った容貌は貴族や王族の中でも見たことはない。

「今から2年前でしょうか・・・私(わたくし)の知り合いの奴隷商人から、譲り受けました。
その者の話によると、今から12年ほど前に森の中で見つけたそうです。
その当時から眠っており、私が見るまでも、見た後も、一度も目を覚ましたことはありません。
更に、私のとこではまだだったのですが、イリア様のように何かしらを感じた（・・・）お客様もおり、その方たちの協力もあったのですが
やはり無理だった。と言っておりました。」

ロッキーさんが説明してくれるが、その声は、その内容は理解できるのだが、私の心は別のことで占められている。

（なんだ、この胸の高鳴りは・・・）

そう、今までも、初めて大勢の人の前にでた時、戦闘の緊張感、そしてあの時にも様々な動悸が激しくなることはあった。

だが、今感じているのはそれとはまったく違う種類なものだ。
「ちなみに、その何かを感じたお客様は４人いたそうですが全員、女性のかただそうです。」
何故。何故このタイミングでそんなことを・・・？
今までいたその人たちも今の私のような、胸の高鳴りを？
なんなんだ、この感情は・・・
「そ、その名前はあるのか？」
ようやく絞り出せたその声は、震えているのが自分で分かるものだった。
「いえ・・・少し見ていてくださいね。」
部屋の中央で眠る少年に近づいていくロッキーさん。
そのまま浮かんでいる少年に触れ、次に部屋の片隅に向かう。
「・・・・・・・？」
疑問に思うがとりあえず見守る。
と、
「っ！？ろっ『ガンッ！！』・・・・ふぇ？」
いきなり、カスターネだろうか？何かの怪物のような顔を柄にあしらった反りのある剣を手に、浮かぶ少年に振り下ろす。
さすがに声を上げたのだけれど・・・剣は少年の少し前で何か（・・・

）に弾かれる。

「とまあ、このようにただ触れるだけならば出来るのですが、危険や害意のある攻撃、もしくは、魔法全般は通さないようなのです。なので、こちらからの『アヘンダ・オープン（手帳開示）』ができませんので、名前はおろか、出身もわかりません。」

・・・意識がないにもかかわらず己の身を自動で守る？見たことはおろか聞いたこともない。

「そ、それは『魔力障壁』ではないのか？」

「はい。知り合いのもとで数人、私のもとでも3人ほど『職業；魔法使い』に属する方たちに見てもらったのですが、『魔力障壁』ではない何か（・・）との共通の見解でしたね。」

「一応、私も見ていいかな？」

「もちろんですとも。私としても、彼に何かを感じた方を見るのは初めてですからね。」

魔法に関して専門である『職業；魔法使い』に属する人たちが見ているのだ。

正直、私ごときに何かがわかるはずもない。

ないのだけれど、何故か何かをしなければ、いや、何かをしたいという気持ちになる。

そして、少年に近づきその体に触れる。

瞬間、少年（とそれに触れている私）を囲むように幾重にも魔方陣が展開される。

「お嬢様っ！！」

アイリスが珍しく叫ぶが、不思議と私には危機感が感じられない。

むしろ安心感がある。

十数秒して魔方陣がきえる。

いつのまにか少年は床に横たわっている。

浮かんではいない。

しばらくの静寂が続く。

そして、少年が目覚めた。

私はその瞳を見て、ああ、これが一目ぼれかと初めての感情に結論を出せた。

眠る少年と目覚め（後書き）

ふむ、やっと目覚めましたねー

今んとこあんまり説明的なものは・・な・・・・い？

いや、ずっと説明回。。。なのか？

んん？まあ、いいや（いいんだっ！？

作者――自分で作者って打って背筋に寒気がw――は一目ぼれというのを信じてません。

ん？どうでもいいですねw

感想とかありましたらよろしくどーぞー（ゲザー

神と巻き込まれた少年（前書き）

少し頑張って連投してみました。

やっと主人公です。

四話目にして初喋りｗ

そんな感じでどーぞー

神と巻き込まれた少年

――●●●――

上も下も横の方向もわからない。
明るいのかも暗いのかも判別できない不思議な空間。
そして、その空間自体が俺だということ。
理解できなくても大丈夫だ。俺だって理解してるとはいえない。

漠然と説明されただけだしな。

こんなとこにいたら流石に俺も数時間でパニックになるんだろうが、
「説明された」でわかるようにここには俺だけではない。

「そろそろ、馴染んできたころだね。なにか感じないかい？天君（ソラ）。」

この声の主、自称神の男（たぶん男）アリオン。
俺と同じで姿は見えない。
この異常な、現実かもわからない現状で俺が正気を保ってられたのは、こいつという説明係（話し相手）がいたからだろう。

「ん・・・いや何も感じ・・・あぁ、何かに引っ張られる感じがするかな？」

「うんうん、僕と君の複合体があっちの世界で適合しはじめたようだね。」

うん、正直に言うがこいつの説明は足りないと思う。

その足りない説明を頑張ってまとめると・・・

・俺はアリオンの転生とやらに巻き込まれた
・本来、俺がいた世界に転生するはずだったのが、転生に失敗したせいで“違う世界”つまり異世界への転生になったらしい
・俺とアリオンは今、『生命の根源』とよばれるいわば精神の奥深くにいるらしい
・俺とアリオンは融合しているが人格は俺に任せるとのこと
・今、むこう、肉体のほうは完璧に放置している状態らしいが神の能力～うんたらで守ってるので安心
・こちら（精神）とあちら（肉体）では時間の濃さが激しくちがうこと

などなどだ、最後のに関してはこちらでの1時間があちらでの1年に相当するらしい・・・大丈夫か俺の肉体と思ったが、その点は安心していいという話だった。

「ということは、もう目覚めるのか？」

「そうだね。もう幾何の時間もないね。というわけで最後の質問を受け付けるけど、何かあるかい？」

「最後・・・か、そうだな名前。
名前はどうすればいい？」

「おっと、名前かそれは考えなかったね。
うん、君の好きにすればいいよ。
僕のアリオンでも君の檻神（オリガミ）　天（ソラ）でも
もじってもいい。君は自由だ。」

「そうか。うん。名前は適当に決めるさ。世話になったな。」

「ハハッ　こっちこそ巻き込んじゃってすまなかったね。あそこであの子達が乱入してこなかったらねー」

なんというか、引っ張られる？感じが強くなってくる。

「まあ、いいさ。元の世界に何か未練があるわけじゃないしな。こちらで適当に暮らしていくさ。」

「うん、神生楽しくがなによりだ。君の好きなようにするといい。・・・周りがほっといてくれるかは分からないけどね。」

「うん？なにかいったか？」

「ハハッ　何もないよ。それじゃ第２の生を楽しくね。」

「ああ、わかった」

そこまで言い切ったところで俺の意識？は途切れた。

――奴隷館・ロッキー――

目を開け、飛び込んでくる情報からして俺は室内にいるらしい。

意外だ。てっきり森の中とか雪山の頂上とか、そんな展開になるだろうと踏んでいたのに。

俺にしてはかなり平和な目覚めだろう。

体は問題なく動くようなので、状態を起こすと近くにいた女、１８歳前後といったところか。と目があった。

赤い。紅い。朱い。
どういったらいいのかとにかく紅い、肩口まで届く髪の女。
間違いなく美人の部類、いやトップクラスと言っても過言ではないだろう容貌をもつその女と数秒見つめあう。

前言撤回。
やはり安穏な生活は俺には遅れないのだろう。
その女は恋する少女のように顔を赤くしていた。
恐らく「ような」ではないんだろう。

神と巻き込まれた少年（後書き）

正直に言いますと、登場人物の詳細な設定とか性格とか決めてないです（｜＿｜；）

そんな、愛すべき者たちですがどうぞよろしくお願いします＞m（＿）m＜

アリオンの再登場は今のところ考えていませんけどねーw

評価とか感想とかもらえたりしたら嬉しかったりなんかだったり（ボソッ

よろしくでーす（ゲザー

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9129x/

英雄の条件（仮）

2011年10月31日13時30分発行